
フラッディファイア

氷鴉 刹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フラッディファイア

【Nコード】

N2916Z

【作者名】

氷鴉 刹

【あらすじ】

安全なる土地と安全のために犠牲になった土地。

度重なる核戦争と原子炉の暴発により、かつての国家は滅び、世界は再編成された。

全除染区域を掌握する政府は、資金援助と引き換えに安全な土地を与えた。

弱者は追い出され、安全を手に入れんとレジスタンスとなっていく（フラッディファイア）

キャラ説明

■エペ・ラピエル

どこかの貴族の跡継ぎだったらしいが追放となり、路頭に迷ったところをジャマダハルに拾われた。ステイレットとは幼馴染らしく、ペアを組んでいる。

詐欺のプロの少年。身を売って相手が油断したところで狩る。

■ステイレット

陽気で快活な少女。

狂気に満ちてゆくエペ・ラピエルを複雑な気持ちで見守っている。

■ジャマダハル

団長。

大雑把で大胆。

彼のほとんどが謎に包まれている。

■ツヴァイヘンダー

高慢で俺様。団員中最強を誇る。

フランベルジェを特にかかって楽しんでいる。

意外なことに仕事では主に味方のサポートに回ることが多い。

■ファルクス

人為的にアルビノにされた元踊り子。

日に当たると戦闘能力が著しく低下。

衣で頭から足まで覆う姿はまさしく死神の様。

■フランベルジェ

頭が固くてすぐキレておっかない青年。主人公。

団長のお気に入り。

速撃ちが得意だが、主に命じられるのは一発で仕留めること。

■ バイオネット

世話やきなお兄さん。

なんだか全てが軽い。

よく組むのはフランベルジェ。

立ち込める腐敗臭と火薬の臭い。

あっけがらんとしたかつての故郷に背を向ける。

すすり泣き、地に根を這わすがごとく、頑なに動かぬ彼女を残し若者は立ち去った。

まだあどけなさが残るが、その暗紫色の目は爛々と不気味に輝いている。

「無力か。……これが無力か！」

見せかけの冷静さとは裏腹に心は地下を超えたそのさきの禁断の地のそれよりも熱く、憎しみに拍車をかける。

「……どこにいる？ 金の狗が！ 欲望の狗が！！ この手で首根っこ引き抜いてやる……。刺され、撃たれそれから死んでも絶対にだ！」

憎悪にまかせて若者は走った。復讐する力を求めて、虚しく鳴く腹に知らぬふりをして……。

ある紺夜、東の空が紅に染まった。

風に乗ってきた、あの忌まわしい臭いが聴覚を刺激する。

若者は“狩りたい”という欲望に任せ駆け出した。

もう己がどこにいるのか、分からないまま延々と延びる平原を駆けた。

身を守るための武器さえ彼は持たない。

無謀以外の何者でもない。

「生き残りが居たぞ——！」

本来、人を救済するための組織は今や破壊のために存在していた。

8つの機関銃の銃口が生き残りに向けられる。

彼にあらがう術はない。

身に纏う檻褌衣ではとうてい銃弾を阻むことはできない。

（霊体となつて彼等を永遠に呪い続けるのも悪くない）

口角を吊り上げて奇怪に笑いだす。

されど、状況は変わりはない。むしろ死期を早めるだけだ。

彼等は指をトリガーにかけ引き金を引き、消す。

瞬間。

後方からの光弾が炸裂し、彼等を撃ち抜いた。

「せっかくの仲間を消されるわけにはいかねえなあってことよ。つゝわけでとりあえず消えろよな？」

陰よりの光弾が再び彼等を撃ち抜く。

「口が軽いぞ。屍に語ることなどない、だまって殺れ」

「はいはい」

陰よりの光弾は一撃も外すことなく彼等の急所を貫いた。

8つの屍が地に臥せると、ようやく姿を現した。

「よ、不運な生き残り。ナイフすら持たずに何してたんだ？」

20代後半くらいの全体的に爽やかな印象を受ける人の良さそうな男である。

しかし戦場であるため、緊張は解いてはいない。

「まあ、とりあえず——詳しいことは団長のところに行つてからだな」

「おい……俺は何も——」

「行く宛ても無いんだろ？ その目付き、復讐欲に吞まれてるやつ目付きだ。復讐したけりやついてこい」

謎の男は懷からダガーナイフを渡す。

困惑する青年。

「彼が貴様を殺す可能性がある」と推理出来ぬのか？ どこまでもおめでたいやつだな、貴様は」

陰よりの声。

その声は実に威圧的で冷めきっていた。声からは年を推測することは不可能であるが口調から若くはない男であると思われる。

「はっ。刺されたとしてもこんな娘みたいなほっそい腕では俺は殺せねえよ！」

「なっ……」

「護身用だ。お前はいずれ貴重な戦力になる。お前の意思がどうだろうと生き残りは連れ帰れと命じられている」

「貴様のようなぼろ切れ纏った、どぶねずみみたいなやつは特にな」

嘲笑う声が聞こえた後、その方向から足音が聞こえてきた。

「どこに行く？」

「餓鬼の守は頼んだ。俺様が特例で残飯を片付けてやるから貴様はさっさと帰るがいい」

「お、おい……！」

「ただし、貴様にはやらん。戦力にするだけでは勿体無い器だ——」
不気味な笑い声を残し彼は紺夜にさらに溶けこんでいった。

「と、とにかく……そういうわけだから、ついてこいよ」

男が手を差し出すも青年はその手を払い除けた。

そして、尋ねた。

「……あんた、何なんだ？」

青年とて見知らぬ男について行くほど無用心ではない。

疑わしげに爽やかな印象を受ける目の前の男をその暗紫色の目で睨んでいた。

「対権力者殲滅組織って言うたらどうする？」

しかし、男は眼差しに動じることなく逆に彼を試した。

「対権力者……殲滅、だと？」

復讐に燃える彼が食いつかないわけがないのだ。

思惑通りの応えに男は満足気な笑みを浮かべる。

「だから此処じゃ詳しく話せねえ。——だけど気になるよな？」

問いかければ青年は躊躇いがちではあったがそつと頷いた。

「俺に力を——仇を撃つための力をくれるのか？ 俺なんかに月光に照らされたうつつ向きがちな顔は不覚にも美しい。」

妖しく光る紫水晶に硝子繊維の如く鋭く輝く金糸。

（ツヴァイヘンダーが去り際に言った言葉も分らないこともないな——）

男は思わず苦笑いを浮かべた。

「ああ。団長は必ずお前を気に入るだろうからな。——俺が保証するぜ」

「何……？ それはどういう……」

尚も食い下がらない青年に男は痺れを切らす。

というのもその美しさに気付いてから、男の脳は目の前に立つ青年を乙女と誤認し始めたからだ。

「細かいことを気にするな。今必要なのはお前が復讐をしたいかどうか、なんだよ。答えろ」

理性は虫の息。

（俺は男に手を出すような趣味はない！）

なだめる声は今にも消えそうにある。

エネルギーが左手に満ちる。

“突き飛ばせ”とけしかける本能。

「さあ——！」

マシンガンを握る右手を差し出す。

左手を彼から遠ざけるために勢いよく右を差し出した。

「復讐心を求めるならついてくると言え！」

紫水晶は男を射抜く。

その手はマシンガンに触れて彼は言った。

「……力をくれ」

金剛石のような堅さと光を抱いた声は、長き紺夜に響いた。

青年が男のマシンガンに触れたあと、男は荒廃した街を後にして無人駅へと青年を誘った。

誰もいない無音のホーム。

電光掲示板はあまたの銃痕で見るも無惨な様で、浮かび上がる文字は解読不能。

いつくるかも分からない、ミッドナイトトレインを待つ間、二人はひたすら無言であった。

巨大な鉄の箱が線路を軋ませる音を増幅させる。

二人は徐に立ち上がり、迫り来るそれを待った。

けたたましい摩擦音の後、平坦な電子音が鳴り扉が開く。

男はマシンガンを背にからったまま、何食わぬ顔で乗り込んでく。

青年は男を咎めようとしてあわてて後を追ったが、彼の意に反して静まりかえった車内には男に目をとめる人は居なかった。

（当たり前というのか？）

青年は静かに動揺した。

世界が欲に吞まれる前の自分は考えもしなかっただろう、と。

あからさまに銃を持つ者が現れれば治安維持組織が直に呼ばれ、捕えて行く、それが当たり前だった。

（そうか。治安維持組織は今や治安破壊組織と成り果てたんだつた）

数時間前、己に向けられた8つの銃口を思い出し、彼は自分の中で結論付けた。

そして、青年は男から少し距離を置いて座った。

青年は揺られ、知らぬうちに眠りに落ちていた。

男は理性が再び消えそうになることを恐れ、外を見る振りをしつつ彼を揺り起こす。

「目を覚ませ」

声は未だに余裕が無さそうなままであった。

男は困ったように笑い、ため息を一つ吐いた。

「これが最終なんだ。歩きた——」

「起きている。気付け！」

思わず見下ろせば寝起きの不機嫌そうな視線とぶつかった。

彼は荒々しく男の手を払い除けてさっさと立ち上がり、下車していった。

（偉そうな口利く癖に態度は子供っぽいな）

しみじみと男は感心しつつ青年の背を追う。

男が降りるとけたたましいベルが鳴り響いた。

扉が閉まり、ミッドナイトトレインは再び夜の帳に消えていった。

下車した駅も無人。

旧式の壊れた改札が佇むだけのうち捨てられた駅である。

「経費削減とか言つて、こんな片田舎の駅は全て見捨てられたとさ」

男がご愁傷さまと言わんばかりに今や動かない改札を抜ける。

「ま、俺にはありがたいけどな。何せ、無人駅を知ってたらただ乗りも可能だし」

「乗車券のチェックがあるはずだろ？ 昔聞いた」

片っ端から乗車券をチェックし、持たないやつからはきつちり金を頂く……そのシステムはさすがになくなってない筈であった。

世界が変わりつつあった頃でもそのシステムが続いていることを青年は故郷の者に聞いて驚いたことがあったのだ。

「見廻りか。今の俺はミッドナイトしか乗らねえから長らく遭ってないな……」

男は己の記憶を遡り検索したが、本当に遭遇したことがなかった。

「真夜中だから寝てるやつも多いからだろ。酒飲みも多いしな」

“まったく酒臭くて堪んねえったらありやしねえ”と忌々しそうに吐き捨てる男。

実に表情がころころ変わる男である。

喜怒哀樂をはつきりと出すこの男からは、まだ認めてはないが悪い印象を全く受けない。

（こんな時世じゃなければさぞモテるだろうな……）

青年は羨ましいやら惜しいやら複雑な気分であった。

「さて、そろそろ行こうか？」

「ああ」

そう、短く返せば出会った時のあの爽やかな笑顔を浮かべ、男は歩み始めた。

「ここだ」

まだ夜が明けぬ暗闇の中、男が案内した場所は何の代わり映えもしない一戸建てであった。

外観からして二世帯住宅。

丈の高い枯れ草が庭を占め、玄関の灯は塵を被りくぐもった光を出すばかり。

「こんな夜中でも起きてるのか？」

乗車した時間を1時過ぎと仮定すると現在時刻は2〜3時くらいと思われる。

一般人はとつくに寝入っている時間である。

「インターホン鳴らしゃ誰が出るさ」

そんな男の軽さに青年は驚かされるばかりである。

（この男と居たら何もかもが偽りになるな）

男と出会ってからというものの、今まで信じていた“常識”がここごとく通用しないことを青年は思い知るばかりであった。

「ぼーっとしてんなよ。ほら、行くぜ」

知らない内に男はインターホンを鳴らし、鍵を開けてもらっていた。

彼はすでに扉を開いて中に入りかけており、外でつつたままの青年を笑っていた。

靴が乱雑に4組、女性用、男性用、そして子供用あった。

男のが加わり5組。

「あとツヴァイヘンダーの分だ」

見かねたように男は呟いた。

「丁度よかったぜ」

早くこいよと男に促される青年。

板張りの廊下を抜け、階段下の物置に到る。

そこで男は床下収納を開けた。

スパイ映画でありがちの何の変哲もない隠し階段が地下へと誘う。

男によれば湿気のことと考えてのコンクリート製とのこと。

木は確かに地下の多湿下では腐る可能性がある。

ヒヤリとする大気。

頑丈な金属製の扉にはセキュリティがある。

パネルから出る光を眼に当てる男の様子に青年は興味を示す。

「それ、映画とかに出る、あれと同じか——？」

依然として堅さはあるが、興味津々な視線に男は気をよくする。

「おう！　ちと旧型だが」

このセキュリティは三つの認証を必要とする。

一つ目は目の虹彩に映る毛様体が織り成す紋様。

二つ目は小指の指紋。

そして三つ目はパスワードだ。

「これで旧型？　これ以上どこをどう強化するつもりだ……」

気難しい表情を浮かべて、青年は呟く。

男は、その様子を密かに笑いつつも、手際よく認証を終え、扉が開かれる。

そこは地上と間取りが同じの空間であった。

「上はカモ、こっちがホンモノってこと」

そう言うとは故か男は突然周囲に警戒し始めた。

（おい、自分の家って言ったよな？）

分けも分らず青年もとりあえず警戒体制をとる。

慎重に廊下を抜けて、突き当たりの扉に差し掛かったとき男は振

り返り、注意を促した。

“何も話さないこと”と。

青年は頷いた。

今のところ頼れるものは男しか居ない。

それに、男はこの手の危機を回避する術を知り尽しているだろうと青年は評価していた。

わけはわからないがとりあえず、彼は従うことにした。

カチャリ。

扉が開くと同時に風の音が向かってくる。

「侵入者、失せろ」

風は鋭い紅眼のまさに無色と言つべき人間であった。

腰まで届く豊かな銀髪を二つに結わえ、その肌は限りなく白。体は骨と皮のみで構成されていると言っても過言でもないほど細い。

「馬鹿言うな。生き残りだ、い・き・の・こ・り！」

「ならば、その証拠は？」

汚れなき救世の巫女のごとき声は刃物のごとき鋭さを孕んでおり、鮮やかに敵の心を斬り裂いてゆく。

「もしそれを信じ、我等がありかを知られることにでもなった時は、お前の血を夜露の代わりにもらおう」

スレンダーな肢体を浮かび上がらせた黒のスリット入りミニスカを荒々しく捲る。

露になった右太股の黒皮のベルトからダガーナイフを抜き、彼女は青年に踊りかかった。

「無茶苦茶だぞ！ 素人にいきなりへまするなってあまりにも！」

男は腰からソードブレイカーを抜き、色無き女のナイフを受け止めた。

「下がれ銃剣！ 泣きじゃくる餓鬼は不要、弱者は我が刃の錆となるのみ！」

男の行動にさらに腹を立てた女は左太股からさらにダガーナイフを抜き、右のナイフを捨て、左で再び青年に襲いかかる。

「やべっ！」

女の動きは速く、素人では到底回避はできない。

男はがつくり肩を落とした。

——しかし。

『キーン』

軽金属が擦れ合う音が狭い部屋に響きわたった。

見れば青年は男から渡されていたナイフを手にし、女の撃を真っ向から受け止めていた。

「お前！ 何だ？」

苛立ちの中に微かに好奇心が芽生えていた。

金属音はそのまま、色無き女は青年に問う。

「俺は、トリアイナの辺境出身の漁師の息子に過ぎない。だが、故郷を奪われてからは数多の交戦を目の当たりにしてきた。これくらい受け止められなくては生きていられなかったものでね」

「ふん、“少々”能があるようだな」

「ああ、“少々”使えるかもしれないな」

ふふつとミステリアスに笑うと、彼女は二つのナイフを太股のベルトに納め、青年を誘った。

「面白いわ。きっと主も気に入る。さあ、ついて来なさい」

青年は急変した女の態度に戸惑い、男に視線を送る。

男はただ無言で頷いた。

誘われるままについてゆくと、広いリビングに出た。

埋め込み型の大型液晶、雑多に床を覆う雑誌、地図、何かの書類。きらりと光を反射するもの——銃弾やナイフや手榴弾等——が時折潜むこの床。

白い壁面は画鋏の痕、誰かが殴った痕、目を疑いたくなるが痕の中には銃痕もあり、無惨な有り様だ。

家でありながらまるで戦場のようなのである。

「久々の生き残りかと思つて期待してみたが、細腕の拳動不審女か」
ゲラゲラと品の無い耳につく笑みが部屋に響いた。

「何！」

青年は勢いよくその声の方向に身を翻した。

彼はソファに座る、日に焼け、無精髭を生やした筋骨隆々の中年男性をその視界に捉えたと脇目もふらず殴りかかった。

「無礼者！」

色無き女の拳が青年のみぞおちに食い込む。

細腕からは到底出し得ない常識破りの力が青年から意識を奪った。

（ドサッ）

紙が白き羽根のごとく空を舞う。

一時的に主を失いし器は重力の誘いのまま地に平伏した。

「若気の至りか。全く羨ましい限りじゃねえか！」

男は再びしわがれた笑い声で部屋を満たした。

そして立ち上がり、地に伏した青年に歩み寄る。

「名は決まりだ」

青年からダガーナイフを取り上げ、色無き女に手渡す。

「ベイオネットにこの餓鬼の世話するように言え。ぶちこむ場所は一番強いのが分かったかあ？」

色無き女は無音。

騒ぎに紛れ、自室へ行き、くつろいでいた男の脛に会心の一撃をかまし、急き立てた。

「命令、すぐに従え」

「痛てツ！ わあつたから蹴るな！！」

いかにも面倒くさそうに彼は追い出されるようにして部屋を出た。
「つたく、ロクなことがねえな！」

変人との任務、長時間の戦闘、そして生き残りのお守りで彼の疲労は限界近かった。

そんな状態でやっと帰還し、リラックスしかけたところでの脛蹴り。彼は特に心がボロボロであった。

「あーだんちよ。何でこいつ寝てんですかー？」

紙に顔を埋め、動かない青年の姿に男は苦笑した。

「さあ？ どうだったかあ忘れたなあ」

とぼける上司に溜め息一つ。

「こりや駄目だ」

男は青年を担ぎ、一番堅牢な部屋に閉じ込める。

長らく使われていなかった部屋は埃に満ち、寝台も布団もやけに灰色く濁って見える。

床は塵で白くコーティングされ、踏み出すたびに塵は空に舞った。

「つたく、こりや驚きだねえ」

憐れみつつも今の彼には他者に情けをかける余裕もなく、青年を果てしなく埃っぽい寝台に起き、出ていった。

（私は残るわ。この、廃墟に……）

“駄目だ！”

砂埃の舞う中、黄昏の幼馴染み。

涙が幾度も下り、濃く痕を刻んでゆく。

壊れたようにただ微笑んで、同じ言葉を繰り返す。

（私は残るわ。この、廃墟に。私達の想い出に……）

“駄目だ！”

砂埃の舞う中、黄昏の幼馴染み。

涙が幾度も下り、濃く痕を刻んでゆく。

壊れたようにただ微笑んで、同じ言葉を繰り返す。

（私は残るわ。この、廃墟に。私達の想い出に……）

“私達？”

浮かぶイメージが揺らぐ。

理由は不明。

“彼女は、名前は……”

今更気付くのだ。

幼馴染みの名を、いやその存在自体が仮想か現実かどうかあまりにも不確かであったということに。

“じゃあ、自分は誰と一緒にだったんだ？”

もう壊れた人形のようにうわ言吐く女の姿はない。

不確かな霧が荒野をさ迷っているだけだった。

「起きろ。団長が呼んでいる」

胸に圧迫感を感じて青年が目を開くと、昨日の色無き女が青年の胸を踏みつけていた。

「殺す気なのか？」

「ソレはおマエ次第」

刻み込めと言わんばかりに去り際に彼女は再び胸を強く踏みつけ、機械的な調でそう吐き捨てた。

踏みつけられた胸の痛みはまだ感じない。

違和感に顔をしかめつつ、青年はよろよると立ち上がった。

身を横たえた跡が綺麗に残る埃化粧した寝台。

潰れ疲れきった座布団が2つ床に捨てられている。

クロス張りではあったが、威圧感を放つ壁は恐らく防音加工か。試しに叩いてみれば、手の甲に鋭い痛みが走っただけ、ひたすら沈黙であった。

「化石か？」

思わず青年を呟かせたそれは、ビデオレコーダー付きのブラウン管テレビ。

画面は濁り、画質は如何にも低そうな旧式中の旧式。

「いつから放置されているんだ」

ブラウン管が世間から消えて少なくとも20年は経っていた。それから推測すれば。

「掃除するか」

とんでもない部屋を与えられたものだと言わせた。

「やっと来たか、餓鬼」

相変わらず口が悪い男である。

青年は思わず眉をつり上げたが、堪える。

（仇討ちのためだ。耐えろ！）

生きるためにも力は何よりも大切であった。

喉から手が出るほど欲しがる者は腐るほど居るこの世で幸運にも得たこの機会をむざむざ逃すわけにはいかない。

「昨日はご無礼申し訳ありませんでした」

声を絞り出して、頭を下げて、そして膝、手で地に触れる。

「土下座とは古式だなあ」

愉快だ愉快だと男は豪快に笑い、青年を片手で立ち上がらせた。

一心に貫く瞳孔が開いた漆黒の目。

そのまま彼は猛禽類のよう。

抜かりなく青年の全てを探る。

「問題無しだ」

ハンターの顔はあっさりと言わせた豪快に笑う。

そして、青年を抱き寄せ頭をくしゃつと撫でた。

「今日からおめえも仲間だ、フランベルジェ！」

「フラ……ベル？」

「今日からそれがおめえの名前だ、フランベルジェ——！」

名も無き霞は、遠き荒野で未ださ迷えど、己を見付ける。

（ヲシト イエモ ガナノヨ ネカモメ）

廃墟の亡霊、センジョウの紅に呪われし歌つむいで、さ迷う霊を
我がモノに。

（モカヨ トナク メエボ ヨシウ）

青年がフランベルジェという名を貰い、数日が経った。

しかし、彼は未だに仲間の顔も名前も知らなかった。部屋から出ようとせず、密やかに掃除ばかりしていたからだ。

力は未だ無い。

彼に力は無いままである。

銃も銃弾もナイフさえも彼は所持を許されていなかった。

（このままでは囚人となんら変わらない）

心の奥底で彼は焦っていた。

「はあ？ あいつの守りをしろだと？」

フランベルジェの部屋の前では茶髪の男——バイオネット銃剣——の不満げな声が響いていた。

「そうだ。軟弱な火炎など俺様の側には要らん」

対して応えたのは任地より帰還したばかりの極サディストことツヴァイヘンダーであった。

怒るバイオネットに対して、この男はにやりと嫌に余裕たつぷりな笑みを浮かべただけである。

全ての論は、彼の前ではたちまち無に帰す。

「わあつたよ。で、守りつて何すりやいいんだよ？」

溜め息混じりにバイオネットは訊いた。

彼も例外なくこの男に抗議するだけ無駄だとすでに諦めていた。

「一、部屋から連れ出せ。二、戦いを教える。これが貴様がすべきことだ。手を出すことは断じて許さん」

「はっ誰が男に手え出すかよ！ 手に入れてすらないのもう独占欲か？」

ふんと小馬鹿にして鼻で笑ってやれば、

「手に入れてないだと？ 何、寝言を言っている？ もうあれは俺様のモノだ」

サディストはさらに気味の悪い笑みを浮かべて男を馬鹿にした。

「俺様が得ると言ったらそこでそれは俺様のモノになる。モノに感情など所詮、与える必要はない」

また奪うモノには――笑みを消え去り、地が唸るような低い声で続ける。

「しかるべき確実の死が訪れる。俺様が望まなくともだ」

「は？」

「愚か者の貴様には到底分かりそうもないな」

再びあの笑みを浮かべ、去り際に“任務を依頼しておこう”そう言つてバイオネットは一人残された。

「守りねえ。エペに手伝つて貰うか」

固く閉ざされた扉を見つめ、うわ言のように言つた。

やはり開く気配はない。

声も聞こえてはいないようである。

（可哀想なやつだ）

言わば大蛇に巻き付かれし小ネズミ。大蛇は次第に確実に近付き、逃げ道を奪い、その身で拘束するのだ。

もがくほどに大蛇が快楽が増えるばかり、救われぬ報われぬ、そんなことが待とうとはまだ青年は知らなかったのだった。

その青年ことフランベルジェは険しい表情のまま自室に閉じ籠っていた。

彼の眉間に皺を刻むのは、部屋の埃っぽい、いかにも体に悪そうな空気であった。

今や黒い毛玉となりはてた雑巾が物語るように、ありとあらゆる場所拭きあげた。

そして、洗濯可能な物は全て洗濯した。

しかし、空気だけは浄化出来ないままである。

（扉を開けっぱなしにするのは不用心すぎるが、これでは本当に体を壊しかねない！　だが）

彼の心の中では一つの事柄が堂々めぐりしていた。助けてくれたとはいえ、今この建物に住まうのはテロリストに違いない。

特に自分に様付けするような長髪ナルシストは油断ならない。

フランベルジェはどうすることも出来ず煙たい部屋の中で未だ悶々としていた。

「誰かと思えばベイオネットでしたか」

澄み清らかな少年の声。

声の主の名はエペ・ラピエル。

繊細な彫刻のように整った目鼻立ちに、銀系のようなブロンドの、育ちのよさを感じさせる少年である。

その証拠に彼はここに来る以前から彼の世話をしていたステイレットに頼らずには服を着ることさえままならない。

「ざつと半月振りだなあ！　今回ミッションがやけに長引いたぜ」

ベイオネットが心底疲れ果てましたと言わんばかりのテンションの低さで話すと、エペは無邪気な笑みを浮かべた。

「ツヴァイヘンダーが相手なら仕方ないですよ。相変わらずミッション以外の戦地にも赴くそうじゃありませんか」

口では困ったものですと言いつつも彼には関係のない話だ。

そこに本当の哀れみはなく、クスクスと少年は笑っている。

「笑い事じゃねえぞ！　いくつ命あっても足りそうにねえ」

「まあまあ、今ここにいないならいいじゃないですか。それで？　何か僕に用があつて来たんでしょう？」

ピタッと笑うのをやめ、エペはベイオネットを直視する。

ベイオネットも気持ちを入れ換え、エペに向き合い口を開いた。

「世話を手伝ってくれねえか？」

エペは首を傾げた。

「何の動物です？ 犬、鳥、猫……あるいは魚？」

この少年はバイオネットが気まぐれにペットとする動物を拾ってきたとも思っているようだ。

（一応、新入りの知らせはされた筈なんだがなあ）

少年にはこれといった関心を示すような事柄でもなかったらしい。

バイオネットは苦笑しつつ、

「人間だ」

と、一言。

「俺が世話するのは人間、ペットじゃねえぞ？」

「へえ、貴方が人間の世話を？」

「変だと言いたそうな顔だな！」

「いえ。僕は世話される方に興味がありましたね」

舌を出し、悪戯っぽく笑うその姿は、まるで甘美かつ危険な園へ誘うさる伝承の蛇のようであった。

「今回の新入りには手え出さない方がいいぞ？」

この少年の仕事柄、ベイオネットは忠告する。

魅惑し寝取り、油断させそして殺す、しかも性別は関係なしにだ。

右も左も分らない今回の新入りは、易々とエペの罠に掛らずとも限らないし、今回の場合、ツヴァイヘンダーが手込めにしようともしているのではなおのこと悪い。

「そういわれるとなおのこと——」

「駄目だ！ 駄目つつつたら駄目！」

ベイオネットは必死の形相である。

普段は垂れ目がちの目はややつり目気味で、眉も同様につり上がっている。

見るからに必死の形相である。

「そこまで言うなら仕方ないですね。とりあえず手伝いはしてあげましょう。まあ、せいぜい僕は話し相手くらいにしか成れませんがね」

棒読みであった。

不安要素はあまりにも残りすぎてはいるが、ここは頼れる人間がこの少年しか居ない以上——女は色恋沙汰となると最悪、戦力にならなくなるため不可（ファルクスは女としての生体機能を失っているため例外）——妥協するしかなかった。

「じゃあ早速行こうぜ。手伝ってくれんなら」

「もちろんですよ。どうせ空き時間もあることですし」

そういつとエペは足取り軽く部屋からさつさと出ていってしまった。

（ヤケに機嫌がいいな。なんかゾツとするぜ）

微笑んではいるものの、仕事以外では少年は楽しそうなそぶりな
どそうそう見せない。

つまり、獲物にし得るモノが見極めに行ったのだ。

（つたく、どいつもこいつも狂ってるぜ）

心のうち、悪態ついてバイオネットも部屋を出た。

フランベルジェはまだ悩んでいた。

依然として部屋は埃が舞い、不快指数が高いまま時ばかりが過ぎていく。

（窓が無いのがこんなに不便とは）

なくして有り難みを知るなんとやらとはこのことである。

地下かつ、シェルターなので仕方がないことだが、住むにはやはり
向いてないように思われる。

（だが不思議と懐かしくもあるな）

村が襲撃された時も彼はこのような地下の堅牢なシェルターに居
たのだ。

（今思えば奇妙だが）

辺境の村ごときに堅牢なシェルターなど普通は建設されないはず
だ。

流れ、さ迷い、辿り着いた街、町でさえシェルターなど無かったの
だから。

“地下にあったのかもしれない”

故郷やこのアジトのように、敵の目に触れぬ暗く湿ったこの地中
に震え潜む人々は密かに生きていたのかもしれない。

シェルターの存在を依然当たり前だと思い込んでいるフランベルジ
エはそう結論をだした。

無論、シェルターなど普通には存在しないのだが。

隠れる場所もなく、爆風、火炎、熱線に人々は無力に屈するしかなかった。

立つ者も煙、死体、狂気の人間に蒸せび泣くのみ。じきにそれらも力つき、中身なき屍となり果てた。

それでも生き残った者も、人が放つ銃弾の前に一人残らず倒れて逝くのだ。

フランベルジェはそんな世の常さえ知らなかった。

徐にドアがノックされる。

極めて控え目な、弱々しいノック音であった。

（誰だ？）

バイオネットのノックにしては行儀が良すぎるし、あの色のない不気味な女は有り得ない。

つまり、新たな来客である。

神経をぴんとはりつめて、警戒し、何をされても受け流せるよう身構えながらそつと扉を少しだけ開ける。

「何の用だ？」

そう問う、フランベルジェの眉間には深く皺が刻まれ、眉はつり上がっている。

不機嫌極まりない表情である。

「そんな怖い顔しないで下さいよ」

狭い扉の隙間から覗くは微笑むまだあどけなさの残る少年であった。

「あーっ！ 悪いフランベルジェ！」

バタバタと慌ただしい足音と共に見た目が爽やか男も現れる。
（全く何用だ）

フランベルジェの眉間の皺はさらに深くなる。

「突然、悪い！ とりあえず、部屋に入れてくれ！」

「断る」

「じゃあ入る——って断るのかよ!？」

「当たり前だ。得たいの知れん用事で入れられるか！」

フランベルジェは渾身の力でノブを引く。

「僕は君に用事があるんですがね」

「は？」

フランベルジェに一瞬の隙が出来たのを見逃さず、エペとベイオネットはノブを掴み引つ張り部屋に滑り込んだ。

「お、お前ら！」

襟を掴んで外に放り出そうと振り向いた時にはすでに二人は、思い思いの場所できつろいでいた。

「お邪魔しますね、フランベルク——」

少年は頭に来るほどにこやかである。

「フランベルジェだ！」

さりげなく名前を間違えられているのにも気付き、フランベルジエは思わず怒鳴る。

「おお、やーっと名前覚えたのか！」

「煩い！」

ベイオネットには口だけではなく拳まで出る始末。

ちなみに拳は見事にベイオネットの高い鼻にクリーンヒットした。

ベイオネットは痛さにベットの上で蹲っている。

「絶対、汚すなよ！」

特に血は、普通に洗濯機にぶちこんでも落ちてくれないつわものだ。

他人の血のついたシーツなどごめんである。

「ごめんなさいね、フランベルジェさん。僕が押し掛けたばかりに……」

少年はベイオネットにハンカチを差し出しながらフランベルジェを申し訳なさそうに見つめた。

「いや、お前は悪くない。全部こいつのせいだ」

少年の青いハンカチを見事に黒く染めてしまっている男を指差し、言った。

「恩は確かにある。だが、それ以上は結構だ。放って置いてくれ」
抑揚なく、ただ淡々と言い放つフランベルジェ。

だがベイオネットも黙っちゃいない。

ハンカチで鼻を押さえたまま、鼻声で彼は応えた。

「戦いなんて知らねえくせして、ど素人が！　ただで置かせて貰えるほど甘くはねえんだここは！」

カッとなってわめくベイオネット。

「だんちよの命令でお前の面倒をみなきゃなんねえんだ。犬死にさせたりしたら……俺も危ねえ訳よ」

実を言うと団長よりむしろツヴァイヘンダーが恐ろしいわけだが、理由を説明するのは気が引けた故、避けた。

だが、

「むしろツヴァイヘンダーさんが怖いのでは？」

と、ムカつくほど整った笑みを浮かべた腹黒少年がぶち壊した。

「ツヴァイヘンダー？」

名を聞いて考え込むようなそぶりをフランベルジェが見せる。

「ええ、切長の眼をした黒髪長髪のどことなく蛇を連想させる男性です」

そうエペが説明すると、

「ああ、あの長身の、変態そうなやつか」

と、あっさり納得した。

どうやら名前と人物がまだ一致してないだけのようである。

「で、何故団長より恐れる？」

表向きはそつけない、興味の無さそうな態度なのだが、沈黙が長くなるにつれ、端正な細めの眉がいぶかしげにつり上がってゆく。

「身をもつて知ることになる。説明させないでくれ」

最終的にはじりと詰め寄られ、バイオネットは観念しそう言った。

冷や汗が頬を伝い、眉は困ったように下がってしまっている。

その様子にエペは笑った。

「まあこれくらいで許してあげてください。説明は僕がしましょう」

「ちよつとま……」

「じゃあ貴方が説明しますか？ 出来ますか？」

お決まりのにつこりとした笑顔を浮かべればバイオネットはあっさりと閉口してしまった。

「早く言ってくれ。待たされるのは好きじゃない」

不機嫌そうにフランクベルジェは言う。

眉間に皺を寄せ、腕を組み、いかにも機嫌が悪い。

エペはその態度にも動じず、ただ一言告げた。

「後方には気を付けて下さいね」

「は？」

フランクベルジェには何のことかさっぱり分からない。

眉間には溝が深く刻まれた。

「そのまんまですよ。気を付けるんです。貴方は——いえ、止めておきましょう。とりあえずこれから仲良くしましょうね」

そういうと少年はフランクベルジェに抱きついた。

フランクベルジェは突然のことにどうすることも出来ずただただ呆然と立ち尽くすだけだった。

「あと、子供だと思って侮るとお仕置きしますから」

クスツと笑み、離れ際にそう残して、少年はバイオネットを連れ

だつて部屋から出ていった。

（背後に注意、だと？ 戦場でもない、ましてアジトで……何故警戒する必要がある）

フランベルジェは躊躇しつつも顔だけ振り返る。

当然、誰も居なければ敵襲もない。

次に、彼は自分の背中を慎重に余すことなく触れる。

ここも当然、何も異常は見られない。

（何も注意することは無い。何なんだ？ 背後に注意とは）

気になって仕方なく、彼は気難しい表情を浮かべていた。

苛ただしげに足を鳴らし、不規則なリズムを刻む。

片付いたお陰でうろつくと歩き回れるようになったのも助けてか、彼の集中力は高かった。

生憎、答えは出そうになかったが。

一方、フランベルジェの部屋を出た二人は、部屋に戻る途中で団長に呼び止められていた。

仕事の命令かと思えば、そうでなかった。

「なんの用ですかあ？ だんちょ」

赤染めのハンカチで鼻を抑えたままのバイオネットが呑気に聞く。

その横ではエペがくつくつと肩を揺らして必死に笑いを堪えていた。そんな二人を団長の右座に控えるファルクスは紅の眼をきつと細め、睨み据えている。

団長が居なければきつとその首を刈り取ってしまうだろう。

彼女は酷く殺気立っていた。

団長は目の前に広がる奇怪な情景を微笑ましく思いつつ、口を開いた。

「餓鬼の様子はどうか？」

「ああフランのことか。まあ元気だぜ？ 元気すぎるくらいだ」

そついうと彼はハンカチをたたみ直し、まだ酷く染みてない部分

をも染めて行こうとする。

（もう止まってもおかしくないのに、気付いてないんですね）

エペはクスクスと隠れて笑った。

ハンカチはもう染まっていけない。

「あいつに鼻をやられたのか！ だらしないやつめ」

大口開けて天井を仰ぐほど反り返り、豪快に肩を揺らして団長は笑った。

「だらしない」

その横に控えているファルクスも侮蔑を含ませ、さりげなく呟いた。

紅い目はさらに鋭さを増す。

バイオネットの隣に居る、ついにエペは堪えられなくなり、腹を抱えて苦しそうに笑い始めていた。

「皆して何だよ！」

バイオネットは叫ぶが、彼の顔もまた笑っていた。

素人かつ細腕のげんこつを避けきれなかったことは事実だし、何よりも彼にとって、はりつめがちな空気が和らぐことは純粋に嬉しいことなのだ。

照れ臭そうに頭を掻いて、彼はまた笑った。

「全く、本当に馬鹿ですね」

苦しみなど知らない、無垢な子供のような笑みである。

どんな場面においても彼は余裕——一種の諦めのような誰かへの贖罪のようにも取れる——を保ち、銃弾が身を貫き、死神が微笑もうが彼は笑っていた。

そんな彼を思い返すたびエペの疑問符は増える。

“何故、復讐に身を置くのか？”と。

しかし、時折見せる激情は、誰よりも激しく、他者に義務付けられた戦いや安直な諦めを酷く嫌悪しているようだ。

（何故？）

表立って聞くのはタブー。抑え込むほどに興味は湧くばかり。

エペもやはり子供であった。

エペはバイオネットの顔を見上げる。

やはり、笑顔の下に隠れた真の表情は見えそうにない。

「ん、俺の顔に何かついてるか？」

視線に気付いてバイオネットがエペを見下ろす。

エペはふわっと笑顔を浮かべた。

仕事柄、感情をとっさに隠すのは容易いこと、不自然さは無い。

（貴方はとんだ策士ですよ）

馬鹿さは演技？

自分に向けられた爽やかな笑顔を仰ぐと、エペの疑問符はまた一つ増えた。

「おお、そうだった！ エペ、仕事だ」

「今度はどこの色魔です？」

エペは流し目で団長を見やる。

団長は一人掛けソファに深く腰掛け、手、足を組み、少々口角を上

げてじつとエペを見ていた。

「再跪の鐘だ。詳しくはステイレットに聞け」

「了解しました。必ず遂行致しますよう」

所詮道具なのだろうか。

命令を下すときの声は白い女のそれに劣らず、無機質である。

身を案ずる言葉など一切無い。

「出発は明日。失敗したら命は無いと思え」

虚無が言う。

紅がまがまがしく爛々としていた。

「心配しないで下さい。骨の髄までしゃぶりつくしてやるつもりですから」

紅にエペはニコリと人の良さそうな笑顔で返した。

（貴方だって所詮道具）

愚かなまでに付き従う女。我を失い、駒になり果てた女。

（ありもしないモノを望むなんて愚かですね）

急に滑稽になり、くつくつと含み笑いをした。

背面は白く塗られ、自分だけがひたすらくつくつと笑っていた。

「ほら、行くぞ？」

ベイオネットに声をかけられるまでずっと。

リビングを抜け、地下空間のさらに奥にある互いの自室へ向かう。

ベイオネットの語りに適当に相槌をうつだけのエペ。

話はそのまま右から左へ流れていった。

それぞれの部屋を前にし、立ち止まる。

「ねえ、ベイオネット」

「ん？」

呼び止めれば、彼はエペの顔を覗き込む。

うつ向き加減の顔。表情は長い前髪のお陰で隠されていた。

「仕事をやっぱり嫌か？」

心配そうに聞いてくるベイオネット。

しかしエペは笑っていたのだ。

くつくつと笑いをひたかくし、彼は返した。

「無いものねだりする馬鹿は僕がみーんな消してあげますよ」

出た声は狂気じみていた。

「絶対に深入りだけはするなよ。無事に帰ってこい」

バイオネットは悲しげにエペの頭を撫でると、扉の向こうに消えた。

——閉ざした心を開く鍵は未だ見付からぬ。
願いを叶えしものは何処や？ 何処？

ここへ来てから初めて、団員を見送る日、か。
フランベルジェは、毎日欠かさず来る、バイオネットの一言を繰り返す。

だが、自分の言葉にしてもいまいち実感は湧かなかった。
(本当に殺りに行くのか)

今回行くのは、エペだという。ステイレットという赤毛、長髪の外見年齢10代後半程と思われる快活そうな女がつくというが、本当にそれで権力者共を始末出来るのか？

フランベルジェには信じられなかった。

「大丈夫なのか？」

フランベルジェは眉間に皺を寄せ、疑わしげに聞く。

「なあに要らん心配してんだ？」

それと対照的にバイオネットは能天気になんて笑って、フランベルジェの頭をガシガシ荒っぽく撫でた。

フランベルジェの皺がより深くなる。

バイオネットでも学習能力はあるらしく、「悪い悪い」と笑ったまま謝るとフランベルジェから離れた。

そして、口を開く。

「エペはな、ああみえてもプロだ。第一、俺がここに来たときにはもう居た。今と違ってなあ……常に相手の心をみすかしたような目をしててな、恐ろしい餓鬼だったんだぜ」

おおこわこわとオーバーリアクションする彼にフランベルジェは即座につっこみを入れた。

「それはお前が慣れただけじゃないのか？」

フランベルジェは数日前に押し掛けてきた少年の姿を目を閉じて、細かく思い返す。

記憶のなかのエペも、時折、人の心をみすかしていたのだ。

みすかすと彼はいつもゾツとするほど整った笑顔を浮かべていた。

（俺が敏感すぎるだけ、か？）

彼が本当にプロならば、他人はきつと気付かないのだろう。

現に今まで生き抜いてきたのだ。

（考えすぎか。第一、まだよく知らない人間だ。心配する必要ないだろ）

結局、自嘲的な結論を一人導いた。

「まあお前の言う通り、大丈夫かもしれないな」

表情はそのまま。

ベイオネットにそう告げて立ち上がる。

「えらい気の変わりようだな」

フランベルジェが自分から出ていこうとした姿をベイオネットは初めて見たのだ。

ベイオネットが満足げに一人うんうんと頷いていると、

「今日は朝飯がまだだからな」

と、いかにも不機嫌そうにフランベルジェは言った。

「ここに来て初めて、お前のおせっかいがなかったおかげでな」

「おせっかいっておい」

盛大に落ち込むベイオネット。

良かれとしていたのだろうが、逆にフランベルジェを閉じ込めてしまう結果になるとは思っても見なかったからだ。

「俺はれっきとし健康体だ。病人じゃない」

勘違いするなと彼の“おせっかい”を痛烈に批判するとフランベルジェはベイオネットを置いて部屋から出ていった。

リビングでは、二人を除く団員たちが思い思いに朝食をとっていた。

ステイレットだけが立っており、彼女はニコニコしながらフライパンに卵を割り入れていた。

（家事はあいつが？）

毎朝届けられる料理は目玉焼きや、サラダ、時折、自家製のパン

などで、質素な物であったが、綺麗に盛り付けてあった。

（確かにあのベイオネットが綺麗に盛り付けるわけがないか）

妙に納得して、ステイレットをしげしげと眺めるフランベルジェ。豊かな赤毛を一つにくくって、フライパンを揺らすたびにそれは揺れる。

時折見える笑顔は、特別整った顔付きでもないが、親しみに溢れとても可愛らしい。

（ファルクスとは大違いだな）

ちらと黄身をフォークで割っているファルクスを横目でみる。相変わらず表情に色がない。

「なーに、黙ってつつたってんだ？」

いつの間にか3人掛けソファに座っているベイオネットがいつもの締めりのない笑顔でフランベルジェを見ていた。

「緊張してんのか？」

「なわけがあるか」

フランベルジェは即座に否定してベイオネットの隣に腰掛ける。

無論、距離を置いてだが。

「毎朝こんな感じなのか？」

そう言って部屋を観察する。

最初に、食パンに目玉焼きを挟んだやつ（いわゆる簡易サンドイッチ）を片手にPC画面を覗むツヴァイヘンダー。

次に、約4人用のダイニングテーブルには無言で目玉焼きをついているファルクス、団長、エペ。

最後に、鼻唄混じりでキッチンで朝飯をせっせと作り、次々と運ぶステイレット。

「意外と普通なんだな」

朝の沈黙も彼女の料理も別段珍しいものではない。

暗殺集団と聞いて、“作戦会議をしながらの朝食”とか“どんな状況でも食べられるような保存食”とかを勝手に連想していたフランベルジェには不意打ち的光景が広がっていた。

「そりゃあな。流石にオフの時までサバイバルする必要なんてねえからな」

“まあ地下室で生活って時点でサバイバルかもしれないけどね”
と、相変わらず笑いながら後から付け加えるベイオネット。

「まあそうかもな」

天井の通気孔を仰ぎつつ、フランベルジェは呟いた。

窓の無い生活はそれだけで人間の気をおかしくするには十分である。

小さすぎる通気孔は最低限の空気交換をするだけで、塵、芥まで地下空間から排除してくれない。

「どつりで寝苦しいわけだ」

と、ぼんやりと眺めたまま呟いた。

夜な夜な、悪夢が彼の睡眠を邪魔しに訪れていたのだった。

まるでこの目で見たような錯覚に陥るほど、生々しくリアルな夢。これは、故郷が潰された時の情景よりも不快であった。

故郷は海に面した、日が燦々と照る明るい漁村であった。

しかし、夢に出てくる“故郷”は常に鉛色であった。

大地に根を張る家は要塞の様に堅牢な石造りの家。

大地に立つ人々は蒼白く、痩せこけている。

生ける屍の様に頼りなげに野菜を運ぶ“母”に、骨に皮だけしか無いような細腕で鍬を振るう“父”。

二人は確かに、自身に似ていた。

故郷の父よりも断然、似ていた。

だが、そんな人々は記憶を探ってもどこにも存在しない。

彼の両親は、照りつける太陽の中で笑う血色の良い肌の男女だけであつた。

（夢の悪戯だ。慣れない環境で感傷的になっているだけだ）

独り呟いて、悪夢を振り払った。

「ボサツとしてっから俺が食おうか？」

ふと耳に入ってきたバイオネットの台詞に嫌な予感がし、視線を下ろすと、案の定バイオネットが自分の分のプレーンオムレツを右手に、さらに左手でフランベルジェの分までを我が物にしようとしていた。

「ちよつと！ おかわりくらい作ってあげるからやめてよ！」

橙色の無地のワンピースに三角巾という姿で二枚目を死守するステイレットは戦いに赴くようには思えない、ただの少女であつた。

（エペ、ツヴァイヘンダーはともかく、この子が人を殺す？ まさか）

フランベルジェには信じられなかった。

（こんなに裏の無い表情が浮かべられるものか？）

顔を上気させて、感情に任せてオムレツを投げよ……なんと投げようとしていた！

「いい加減にしないとその顔にぶちまけるよ、おっさん！」

まだ、オムレツは盛んに湯気を出している。中身はさぞ熱かろう。皮が剥けるような重度の火傷には流石にならないだろうが、激痛は間違えなく走るだろう。

（自業自得だろうが、俺の朝食が無くなるのは御免だな）

フランベルジェは徐に立ち上がって、ステイレットの手からオムレツを取り上げた。

皿に乗っていたであろうスプーンは拾った時には床を覆う書類に呑まれ、見失う寸前であった。

「有難く、食べさせて貰おう」

特大の埃に包まれたスプーンを片手にフランベルジェは言う。

そして、そのスプーンを埃はそのままでバイオネットのオムレツに突き刺し、代わりに彼のスプーンを取り上げて、何事も無かったように食べ始めた。

「ひでえな」

突き刺された埃まみれのスプーンに視線を落としてぽつりと呟くバイオネットは、狐に包まれた様な顔をしている。

ステイレットに至っては、奪われた時の体勢から一ミリも動けずにいる。

「食べたらどうだ？ 冷めるぞ」

チラと彼に視線を向けるフランベルジェ。

“食べないなんてありえないわっ”と言わんばかりの表情を浮かべている。

「お前は鬼か？」

「自業自得だろう」

早々に食べ終わったフランベルジェは捨て台詞を残して、皿を未だ放心状態のステイレットに渡し、もうここには用が無いと言わんばかりに部屋に戻って行った。

「怒らせちゃった……」

押しつけられた皿を見てステイレットが溜め息を吐いた。

「あいつはなかなか短気だからな」

気にするなよと励ますベイオネットだったが、

「気にするな？ 元はと言えばあんたのせいじゃないの！」

オムレツはもう乗っていなかったが、皿は男の顔に直撃した。

満腹はともかく腹八分にさえ遠く及ばない。

三時間もすれば腹の虫が自己主張を始めるだろう。

（見事に食べそびれたな）

制裁とはいえ、折角の料理を台無しにしてしまった後では頼みにくい。

（後で、謝ろう）

任務に送り出す時にでも言えばいい。

戦場へ行くのに、争いの痕は残すべきではない。

彼女が一体どんな方法で戦うのか、知らない。

だが、些細な物思いが戦場では命取りになることくらい彼は分かっている。

（俺はまだ、戦えないのか）

“少年と少女でさえ、戦場へ飛び出して行くのに”

自分は何をしているんだ？

自分はいつまで無力なんだ？

突然、焦燥感に襲われる。

武器さえあれば戦えるのだ。

一丁の銃と弾薬、そしてナイフを受けとめるソードブレイカー。それだけなのだ。

しかし、それが手に入らない、どうしても。

（何を渋っている？ 戦場ならいくらでもあるだろう！）

苛立ちに任せて寝台を蹴った。

衝撃音の後、身を潜めていた塵が部屋に充満する。

何の解決にもならず、ただ、さらなる苛立ちを呼び寄せただけであった。

「クソ！」

苛立ちの連鎖は止まることなく加速し続け、彼の意識を蝕む。

我を失い、意味も分からずひたすら喚き散らす。

ある一線を越え、意識がプツリと途絶えるまでずっと。

「おーい、なんで床で寝てんだ？」

意識を取り戻して初めて眼に入っただのは、どこか小馬鹿にしたような表情を浮かべたベイオネットだった。

「知るか」

身体中が軋む。

意識を失ったことさえ知らないフランベルジェは頭に疑問符を浮かべる。

（こいつが、腹いせに？）

そんな理不尽な推理をしつつ、フランベルジェはベイオネットに問い掛ける。

「お前、そんなに朝のこと怒ってたのか？」

腹をたてていたとは言え、さすがに埃まみれのスプーンをオムレツに突き刺したのは我ながらやり過ぎだとは思っていた。

本意ではないが、謝罪しようとも。

だが彼は、

「は？ 朝あ？ 気にしてねーよ、あんくらい。お前こそ気にしてたのか？」

ノー天気にかつと爽やかに笑った。

小さいこと気にすんなよと付け足して、フランベルジェに手をさしのべる。

だが、フランベルジェはその手を払った。

「意味が解らん。じゃあなんで俺が寝てる間に投げ飛ばすなり殴るなり蹴るなりした？」

「what?! いやいやいやいや！ 俺は何にもしてねえって！ 触れてすらないって！」

全身を存分に活用して驚きを示すベイオネット。
しきりに冤罪だ冤罪だと喚いている。

「ただ俺は、もうすぐ任務出立時刻だからお前を起こしに来ただけでありまして……」

「誰の？」

霞ばかりの希望を抱き聞き返す。

睡眠が望む未来へ導いてくれたのかもしれないという子供じみた幻想を抱き。

「おいおい。朝も言っただろ？ エペとステイレットだ」

そんなことあるわけがなく、一人失意に沈む。

「そうか、そんな時間なのか」

落胆の色を隠せぬまま、淡々と無感動に呟いた。

瞳は水鏡のように不気味なまでに澄み、白壁をやや紫に染めて、映しているだけであった。

「大丈夫か？ おい」

「別に何でもない。ただ、虚無を噛み締めたただけだ」

フランベルジェは重く襲いかかる鈍痛に眉を潜めつつも起き上がった。

胴体には目立った損傷こそ見られなかったが、手足は切り傷、打撲、擦り傷で覆われていた。

血は止まっていたが、ゆっくり辺りを見渡せば、至るところに生々しい血痕が在った。

「笑えねえほどタチの悪い悪夢に魘されたっばいな？」

ベイオネットが苦笑いを浮かべながらも傷だらけのフランベルジェに肩を貸し、立ち上がらせる。

「獏に沿って寝てもしてもらったか？」

冗談混じりに彼は言い笑った。

「獏って何だ？」

「ああ知らないか。夢を食ってくれるっていう、絶滅種さ。鼻が長いなんとも間抜けなルックスの四足歩行獣。最も、絶滅したのはここ数年の話つつつか、今の政府が調査をしていないだけかもしれないけど、な」

そうやって消された者は一体いくら居るんだろうな。

ベイオネットはどこか遠くを見ながらそっと呟く。言っですぐに謝罪した、なんでもないと。

「さあそろそろ行くか」

時間だ時間だとわざとらしく急かす。

「がさつだな」

半ば引きずられるようにして部屋から連れ出されたフランベルジエは心底憎々しげにベイオネットを睨み付けた。

「お前を待ってたらあいっすら出発しちまうだろうが！」

「それはすまなかったな」

耳より上で喚く男を適当にあしらって、フランベルジェはセキユリテイロックに向かって一人で歩き出す。

リビングエリアからそこまでは扉は一つしかなく、迷いようがない。

「間に合ったようだな」

扉越しにしゃがれた声と澄んだ跳ねるような声の交差を聞く。

「全く……やれやれだ」

フランベルジェをするりと追い越し、木製の一枚板で出来た平凡な扉を開けた。

「おお餓鬼じゃねえか」

開くや否やしゃがれ声がフランベルジェに飛んだ。

解錠を促すその手を暫し止め、彼はお馴染みの品の無い笑い声で青年を迎える。

青年、フランベルジェもまた、眉間にシワを寄せつつもその笑い声を受け止める。

「ほらほら、ジャマダハルさん、フランベルクさんの機嫌損ねちゃったみたいですよ」

白い障壁と同化せんとするようなま白いブラウスと短パンと言った様相の少年がニコリと笑んだ。

纏う空気はまるで、ちよつと近くまで遊びにいくかの如く橙色。表情は至極晴れやかである。

「はっはっ、餓鬼は餓鬼だなあ」

こちらも上々である。

対照的にフランベルジェのシワは影濃く、そして深くなつてゆく。

「だんちょ、名前覚えてないんすかー？」

フランベルジェの癪癪玉が弾ける前にとベイオネットは慌て問い

かけた。

が、答えは彼の癪癪玉を刺激するだけであつた。

「おお、なんだったか？」

再び盛大な笑い声をあげる団長。

「ちよつと、団長さん！！」

怒られて出立したくはないよつ　とステイレットがついに悲鳴にも近い非難の声をあげた。

「もうつ、わたし朝も怒らせたのに！！」

「全く血の気ばかり多いなあ、餓鬼。そんなんじゃまだまだ任せらんねえなあ！」

その言葉にギリリと、耳に届くほど強く噛み締める。

「生き延びるには、そうだ！　何よりも、いついかなるときも！即座に！　感情を捨てることが必要なんだぞ、餓鬼」

力が欲しければそれに相応しい使い手になりやがれ。

団長はそう言う、何事も無かつたかのように手早くセキュリティロックを解除した。

「さあ行きやがれ！　しくじるんじゃねえぞ！」

威勢よく団長は声を張り上げる。

任地へ運ぶ電車到着まではもうあまり時間がない。

「きつと期待に答えましょう」

少年はニコリと笑む。少女は口を一字に結び頷く。

晴天白日。

彼らは立ち去り、引き換えに外氣を得る。

吹き抜けた風は腐敗に満ちていた。

「感情を捨てる、か」

感情無くして、仇討ちが出来ようか？

「しかし、力を得なくては……！」

フランベルジェは固く閉ざされた白壁を睨み、決意を固める。

「そうだ、力のためだ……」

Good bye silly self.

眼差しを心に向け一人、
呟く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2916z/>

フラッディファイア

2011年12月19日23時45分発行